



髪色  
髪型




髪色

髪型

目色

A perspective view of a traditional Japanese hallway (engawa). The floor is made of light-colored wooden planks. On the right side, there are sliding doors (fusuma) with a light-colored upper panel and a darker lower panel, separated by a horizontal greenish-grey band. On the left side, there are windows with dark wooden frames and white paper panes. A single square lantern hangs from the ceiling in the center of the hallway. The lighting is warm and soft, suggesting an evening setting.

とある土曜日。  
一家の真夏の夕方、、、



「ただいま」  
僕は友達との遊びから一目散に  
帰ってきた。

18時半から始まる人気冒険アニメ「ゼロピース」  
を見たいからだ。

そのためには、さっさと風呂に入っちゃって、  
飯を食い、アニメに万全に備える。

A hallway with wooden floors and glass doors. The hallway is empty and brightly lit. The text is overlaid on the image.

アニメが見終わったら、姉ちゃんとカードゲームで遊ぶんだ。


僕の姉ちゃんは優しい。普通女子ってのは、カードなんて興味ない。

が、姉ちゃんは昔から僕の遊びに付き合ってくれる。

というもの、、、**血が半分しかつな**がっていないから。

当初は年下である自分にかなり気を使っていた。


最近あまりそれを感じなくなってきたけど、、、

A perspective view of a traditional Japanese hallway. The floor is made of light-colored wood. On the right side, there are several sliding doors (fusuma) with a light-colored wood frame and a horizontal green stripe. On the left side, there is a window with a wooden frame and a white paper covering. The hallway leads to a room in the distance where a blue mat is visible. The lighting is warm and soft, creating a cozy atmosphere.

まあ またそんなこと考えてもしようがない。  
親のことはもう忘れよう。

今はアニメだ!!

さっさと風呂だー



「ただいま」

そう思っていると姉が部活から帰って来た。

この人が僕の姉。  
名前は千春(ちはる)。  
土曜日の今日は部活だったようだ。

ちなみにバレー部。練習は過酷のようだ。



「ふう〜♪ めっちゃ疲れたあ〜」

「お。珍しいねえ、勇人がもう帰ってる。  
いつもはまだ友達の家なのに。」

「まあ見たいアニメあるからね。」

!? くんくん。

香り付きボディペーパーで汗の匂いをなくそうとしたのか、

香りに交じって人間特有の汗の匂いが、僕の鼻をつく。

真夏だからか、汗がすごい。

シャツが透けてブラが見えてしまっている。

「ね、姉ちゃん… 匂うよ…」

「え、何の?」

「何のって、汗。どんだけ部活すんだよ。休日なのに。」



「え、うそ!? 汗拭いてきたの!?」

「うん。結構、しかもシャツ透けてる。」

「ホントだ…」

「早くお風呂入らなきゃ…」



そういうとお風呂に行こうとした。

ちよいちよい。僕が今入るんですが。

「ちよ、ちよっと待って。僕が先に入るんだ。」

「ええー。勇人は我慢して。私が入る。汗ベタベタなんだから！」

「いや、僕は先に帰って来たし、アニメまで時間がないよ。」



「ええー。(私も早く、汗洗い流したいな)」

「じゃあ僕入るね〜」

姉は結構昔から僕に甘かった。最近はそのはいかないが。

「勇人！ ちょっと待って。  
わ、私も入るわ。汗我慢できないわ！」

「はい!? 何言ってるの!? やだよ!!」

「いいじゃない姉弟なんだから!!」

「ええー。だって…」



「別に気にしないわよ！」

「昔から裸見てきたじゃない! さあ行くよ!!」

「うっ(確かに別段気にする必要はない)…」

という事で、僕ら姉弟は5年ぶりに、  
一緒にお風呂に入ることになった。



うーん。いくら昔はよく入ったといえど、

「あつーっ」

姉はよほど汗が気持ち悪かったのか、  
一目散に制服を脱いだ。

!?!? ちよつと体が…なんていうか…  
昔とずいぶん…

「さてと♪ 今日も疲れたなー」



「…」

「？」

僕の思考回路と視線がロックされてしまった。





FW!

あ、ちよつと脱出する...

「な、なによ?」  
(まさか…)

「いや、なんでもない。」  
何を考えてんだ。姉だぞ。姉弟だぞ!?

「…」

「… あっそ。」

そういうと姉ちゃんは脱ぎだした。



？

「って姉ちゃん？　なんでバスタオル巻いてんの？」

「は！　いや…別に……なんとなく…」

「き、姉弟なんだろう！？」

「言いだしたの姉ちゃんじゃないか！」

たしかパンツもまだ脱いでないよな？

「ま、まあそうよね…」

「ぼ、僕もう先行くから。じゃ。」

と言いつつ姉を横目に見ると…



おっおっおっおっおっ!  
ちよ!? 僕の知っている姉ちゃん  
じゃないぞ!?



こんな乳あったか!?

ケケケケケツ!?  
こんな大きかったっけ!?  
まるで、大人の...  
嘘だろ...  
成長ってすげえ...

ふんん

ぷるん

ビラッ

フルッ

アッ

太もも...  
プランクだ。  
マレーのせいか?



僕は発育した姉の体に呆然としていた。  
僕の知っている姉じゃ…

「な、なによ!! 早くお風呂行ってよ!!」

「は、はい!」

「なんで敬語よ!?!」

「なんとなく。」

僕は熱くなる股間をひそかに隠し風呂に入った。  
なぜか心臓の鼓動が聞こえるくらい大きい。  
ウソだろ!?! 姉の体に反応しているのか!?!

ポーン!!!



「まあいいわ」

そういうと姉は浴室に入った。

「...」



...

複雑だ。

「やっと、汗流せた〜♪」

真夏の暑さで、ベタベタになった体は、  
きれいになった。

そして僕の頭からもアニメのことは  
きれいさっぱり消えていた。



「…」

姉の体にくぎ付けである。

…エロイ。エロすぎる。

成長は「わい」。



バレー部の影響なのだろうか。

2年くらい？やってるし。

最近姉は夜も部活で遅いし、

僕も遊びに夢中だった。

姉をちゃんと見ていなかったが、

乳もパンパン、  
太ももパンパン……

成長ってこういうことなのか……

僕は、急に姉の「女」を感じた。



「いやあ さっぱりしたね♪」

「う、うん」

「何年ぶりに一緒に入ったっけ？」

「うーん 5年くらいじゃね？」



「…だよね。」

姉は僕の体を見てるようだった。  
なんか恥ずかしい。

「へえ なんか体付き男らしくなったね♪」

いや、「うちのセリフですよ。」

「いや、姉ちゃんも体付き大人になったよね？  
胸なんか特に。いつそんな成長したの？」

「そ、そう？ 結構大きくなった？」

「うん。」



「へへっ♪ やっぱり？ 私も大人の「女」に、  
なってきたってことかな…♪」

うれしそうだな。

やっぱり男の身長と一緒に、胸も大きい方が、  
女子は嬉しいのだろうか？



うーん……いいおっぱいだ。  
見れば見るほど綺麗だ。

さわりたい。  
実際にさわりたい……

うーん……痒い……

太もももムツチリ……  
うーん……イイ……





や、や、  
バイ！！

「ねえ、姉ちゃん？」

「？ 何」

姉ちゃんは風呂にあがろうとしていた。

「……」

「何よ？ そんな私の体じつと見て。」

「……」

「おっぱい触って見てもいい？」



「は!! なななな何言ってるの!？」

「いやー ちよつと触りたいなあと思って。」

「バカっ!! いやよ!!」

「いいじゃんっ 減るもんじゃないし!!」



「ええええ!!」

「一回だけだから!!お願いっ!!」

「えー 彼氏とかできていないのに!? アンタに!？」

「初エッチの練習だと思って。練習って大事でしょ?」

姉ちゃんは少し黙った。

「…たしかに。」

あっけなく納得した。練習という言葉に反応したようだ。

「じゃあ揉むよ？」

「はあ。まあいいわ。一回だけなら。」



「ついでだから、ちよつとだけ吸ってみなさいよ。」

「いいの？」

「どんな感じが気になる。」

「やった。」

アニメのことはもう忘れていた。

「うわっ!」  
おおやわらかい!!  
プルンプルンだ♪  
「スゲー♪」  
これがおっぱい!?

「ま、ま、あね」

モモモ♡

「しゅげゅげゅ  
乳首固い」

「吸って  
みてもいい?」  
「う、うん……」

「あ、あ、あ」  
「や、やばっ♡」  
「勇人の舌、  
めっちゃヌルヌルしてる♡  
くすぐりたい!!!」

「最高♪」  
「(こんな感じなんだ…  
エッチって……)」



「も、もういいでしょ!!」

「あ……うん……」

姉の乳はすばらしかった。  
こんなやわらかいものが、胸に一つできるのか。  
体って不思議だ。

なんか体熱く、ドキドキしてきた。



ここで終わらすのはなんかもつたいない!  
なんかこう……んー……何かまだ……

!

「ね、姉ちゃん! 今度マ○コ見てみたい……」

「ま!?!」  
「あんた、そんなとこ見てどうすんの!?!」

「いや、ただ見たことないから、少し気になって。ついでに見せてもらおうかなと…。」

「え、さすがに変態よ!!」



「いいよ変態でw お願いっ!!  
女のマ○コってどうなってるのか見てみたい!!  
一回だけでいいからw」

「…。」

「わ、わかったわ。  
あんたって結構「変態」だったのね。」

これもあっけなく納得した。

「そうかも。姉ちゃんのおっぱい見てたらさ、  
なんかこう……マ○コも見たくなくて。」

「……バカ。」

？

そういうと姉ちゃんは浴槽に座って、  
股を静かに広げた。



「おいしそうだ。  
「んな感じよ。」

うわっ 割れてるっ!?

「ホントに  
割れてるんだ…」

「ま、まあね  
やっぱり弟でも、  
見られると恥ずかしいわ。」

「中身がさっくするの〜」



「こんな感じ……//」  
姉ちゃんは手で、  
マ○コを広げてくれた。

はあ♡

「すっつ。  
中に穴がある。  
なんでマ○コには、  
穴があるの？」

「そ、それは……//  
ここから……  
赤ちゃんが出てくるから……」

「ここから!? え、指入れてみてもいい!?」  
「う、うん でもゆっくり入れてよ。」

♡



僕は容赦なく  
指を入れた。  
「うわあ!!」

ひん

「うわあ〜  
すげえ♪ヌルヌル♪」

「ちよ、ちよつといじり過ぎよ!!」

「す、すげえ…今の姉ちゃんなんかエロイっ」

「そ、そう!? 大人の色気が出てきたのかしら。」



「ほら、後ろも  
こんなムチムチ♪」

ムチムチ♡  
ムチムチ♡

「ちよつと!?!」  
「成長つてすごいね  
姉ちゃん!」

ムチムチ♡  
ムチムチ♡

「ねえ?ち○こ  
入れてもいい?」

はぁ♡

入れてえ…」

「ええ!?それは…!!!」

く



「ね、姉ちゃん!!  
僕のチ○コすごいこと  
になってる!!」

びんびん

「な!? 何それ!?」  
（これが勃起!?）

「そ、そうだったらしかたないわ!!  
いいわ、一回入れてみて!」  
「え、いいの?」

（この際、エッチの  
練習ってことで）  
「い、いいわ。入れてみて!」

（私もチ○コってどんな感じか  
気になってきた!）







「はあはあ♪、  
姉ちゃん気持ち良すぎて腰が止まらないよ!!」

「はあはあ♡  
あ、あんただけずるいわっ♡」

「今度は、私が思うがままに動くわ!!」

「わ、私が今度上になる!!  
そこに寝て!!」

「はあはあ♪ うん。」

僕は風呂場に仰向けになった。



「うわあ♡ なんか不思議……!!!」  
「私のマ○コにち○こが……」  
「これが……セックスなの？」

「おお、  
入ってるのよく見える♪」  
「ちよつと動いてみてよ姉ちゃん!!」  
「う、うん♡」

「あぁっん♡」  
「勇人のチ○コすごい!!」  
「私のマ○コに吸い付くわ♡」

「あぁっ♡  
すごい♡」  
「なにこれ  
超気持ちいい♡」  
「うわっなにこれっ  
めっちゃエロっ!!」

「あぁ♡こんな  
気持ちいいの  
初めて♡」



「ああ……すいすい……  
ほんとに腰が、  
止まらないわ♡」

「はあはあ……どしどし♡」

「う、うん♡」  
「あんたの子〇〇、  
私の奥まで来て、  
なんかイキそうっ……」

お互い腰が止まらない。

「ね、姉ちゃん？」  
「？♡」  
「な、なんかち〇〇から  
でそうっ……」

「はあはあ♡……  
なんかってっ？  
はあはあ♡」

「……ああっ！  
あああー！」

「？」





「う、うそでしょ!?! ま、まさか!?!」

ハァハァ

うそでしょ!?!

ま、まさか!?!

「う、ごめん…  
気持ち良すぎて、  
おしっこ出ちゃった…」

「あんたこれおしっこじゃないわよ!!  
【精子】よ!! 精子!!」



「せ、せいし?…」なにそれ…  
「うわっ!? いっぱい出てきた…」

ハァハァ

しばらくして姉ちゃんのマ○コから、  
白くドロドロした液体が出てきた。  
これが僕のチ○コから出たのか!?  
「うわ…なんだこれ…」

「私…初めて見た…聞いたことあるけど…  
これが精子…」



「すい匂い…これが…」

ハァ  
ハァ

僕は状況が理解できていなかった。

今は頭が放心状態だ。とりあえず、

この**白い液体**が僕のチ○コからでたら、

意識が飛ぶくらい気持ちよかったのは分かる。

「お腹が熱くてパンパンわ…」

とりあえず、すぐ洗わなきゃ!!」

「ああ…気持ちよかった…」



僕が放心状態のうちに、  
姉ちゃんは必死に自分のマ○コの中を洗っていた。

「あんた出し過ぎ!! まだ出てくるわ!!」

何をそんなに…

でも、そのときの姉ちゃんの様子は、

焦ってはいいたが…

どこか嬉しそうだった…



「ばか。」

「？ 何が？」

「ばーか。」

「だから何が？」

「…信じらんない…」

「？？？」

「中に出し過ぎだよ！ ばあああか！！」

そういうと姉ちゃんは浴室から、  
拗ねるように出て行った。



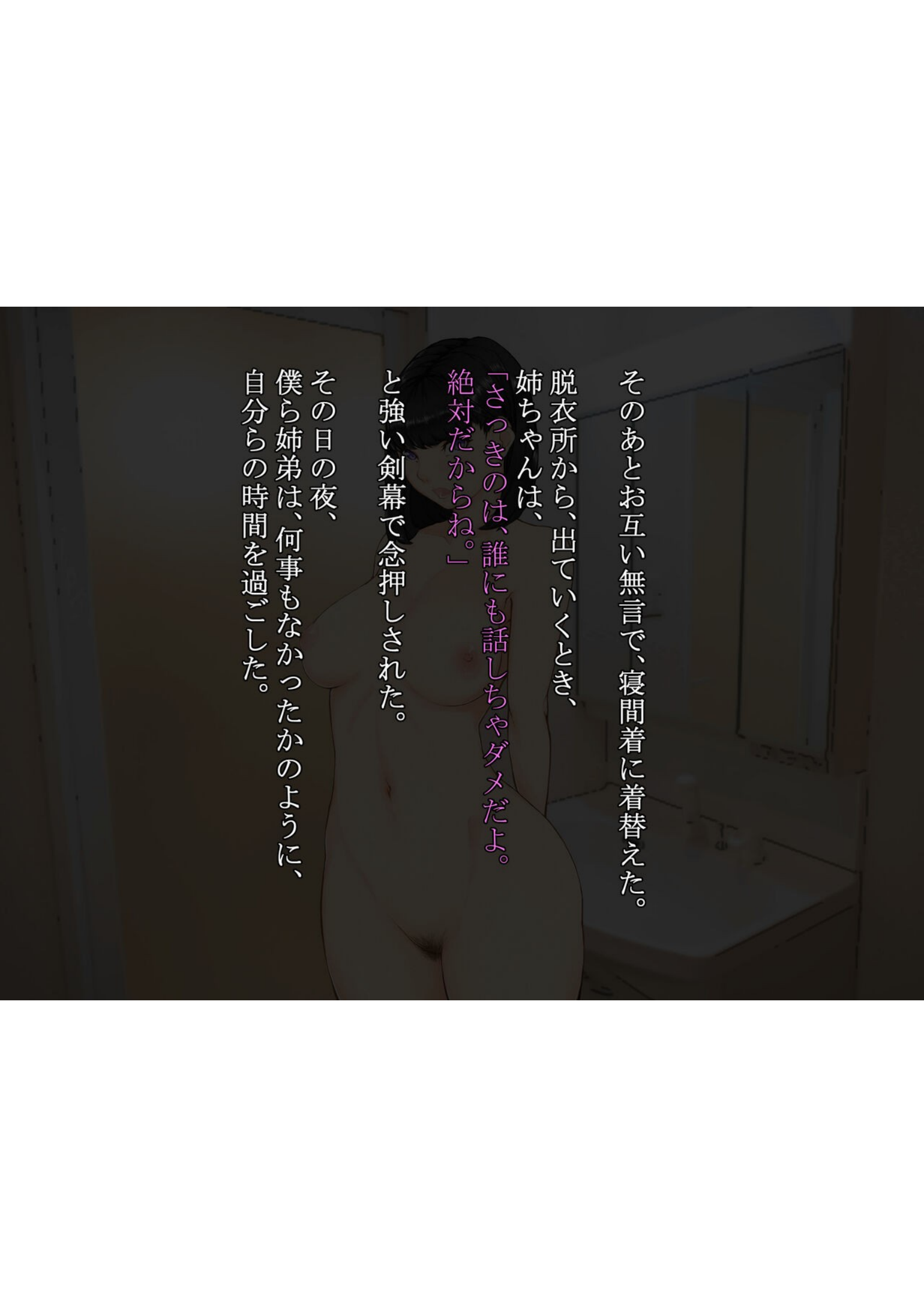
それにしても、  
気持ちよかったなあ♪

でも何か忘れてるような……

……

あ!!  
アニメ!!





そのあとお互い無言で、寝間着に着替えた。

脱衣所から、出ていくとき、  
姉ちゃんは、

「さっきのは、誰にも話しちゃダメだよ。  
絶対だからね。」

と強い剣幕で念押しされた。

その日の夜、  
僕ら姉弟は、何事もなかったかのように、  
自分らの時間を過ごした。

翌日の夕方。  
今日も汗びっしょりで帰って来た。

今日も姉ちゃんは部活だったらしい。  
なんでも県大会が近いんだとか。

「ふう。今日も暑かったー」

「あつ勇人… 今日私は私が入るね…」

「うん。いいよ。今日はアニメもないしね。」

うーん。あれから顔がまともに見れない。

そー考えているうちに、姉ちゃんは風呂へ向かった。



と思つてたら、また戻ってきた。

？

「ね、ねえ」

「何!! 急に!! その恰好でどしたの?」



「…い、いっしょに入らない?」

「…いいけど。まさか、「あれ」?」

「…うん♡…【あれ】もう一回やってみたい♡…」  
姉ちゃんは小さくうなずいた。

あれか……。すごく気持ちよかったけど、  
なんだかとても**してはいけない事**な気がしていた。

でもその時の僕は無知だった。  
姉ちゃんも部活の疲れ、思春期だったからか、  
盲目していたんだ。


「**あれ**」ね!! 僕ももう一回してみたい!!」

「じゃ、一緒に入るよ」

このときの姉ちゃんの写真は、  
昔、一緒にいたずらをしてたときと似ていた。  
すごくかわいいなと思ってしまった。

これが悪夢のはじまりだったと知らずに。





あれから数か月。  
姉ちゃんは太った。  
運動してるのに…

そして姉ちゃんは、  
**あれだけ好きだった部活を突然止めた。**

父さん母さんに聞いても、  
「あんたにはまだ早い話だから。」  
と言われ、相手されなかった。

親は、しきりに姉ちゃんに、  
「相手は誰なんだ!？」  
と言っていた。

だけど姉ちゃんはずっと黙ったまま。

ずっと黙ったままだった…



**THE END**